

第102回 『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

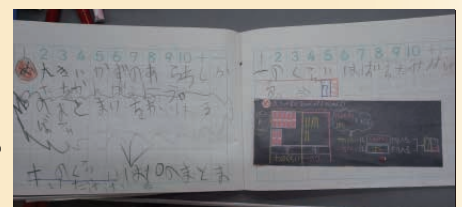
今回も、インクルーシブ教育とICTについてです。

小学校での事例

対象は、小学校1年生の男児Aさんです。Aさんは、4歳の時に多動が目立つということで、専門医からADHDの診断を受けています。それと関連して、字を書くことが苦手であり、黒板に書かれたものをノートに写すことができないという困難さもあわせもっています。また、文字を間違えて書いてしまったとき、消しゴムで消そうとするのですが、不器用なため、消しゴムをうまく使うことができないのです。当然、消す範囲が広くなってしまうため、正しく書けていたところも消してしまうことになってしまいます。その結果、ノートは汚くなり、書く意欲がわかなくなってしまうということがあったようです。

そこで、担任であるY先生は、以下のような方法を試みることにしたということです。それは、ノートに書き写す部分を限定するようにして、多く書かなくてもよいようにするという方法でした。具体的には、Aさんが書くべきところを個別に指示する。もう一つは、板書の内容を虫食いにして、Aさんのノートに担任があらかじめ書いておき、その虫食い部分に、必要なことについて書き込むようにするという二点でした。部分的に指示された板書の箇所を書き写すという方法では、書く量を少なくすることはできるのですが、指示しても、どこを書けばよいのかが伝わっていないことも多く、あまり効果的であるとは思われませんでした。また、ノートに担任が板書の内容を虫食いにして書き込むという方法は、黒板にある情報を正確に伝えることは可能であるものの、毎時間、それを作成することは時間的にも労力的にもコストが大きすぎるため、継続するには大きな困難が伴います。

そこで取り入れたのが、毎時間、黒板をデジタルカメラで写真に撮って、それをノートに貼るという方法でした。この方法であれば、Aさんがその時間に板書を写し取ることができなくても、それを見れば家庭でも復習することができということと、負担が少なくて済むということも大きな理由でした。写真1は、ノートに貼られた板書の写真と、それを確認しながらAさんが書いたノートです。



【写真1】

まだ、Aさんは小学校1年生なので、書くことをしっかり指導することによって、板書を写すことができるようになるのではないかと考える人もいるのではないかと思います。私も文字の指導は継続するべきであると思います。しかし、今、板書を写すことができなくて、情報を得ることができない児童がいるのであれば、板書した黒板をデジタルカメラで写真に撮って、それをプリントアウトして渡すという方法で、情報保障することとても大切なことだと考えるのです。わからない状況を作るよりもわかる状況の方がよいに決まっています。子どもが意欲がわくように、いろいろな工夫をしてみたいものです。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

((著書))

暮らしの中のコミュニケーション (やまびこの里)、クラスルームコミュニケーション (こころリース出版社)、自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア (Eパワメント研究所) など